

内外交差点

今こそ新しいタクシーを創造しよう 世の中の変化に適應するのが経営者の仕事

岩村 龍一氏 (コムタクモビリティサービス会長) 第2/12回

日本型ライドシェアが始まった—らしい。田舎のタクシー屋の親父にとっては、ポカンと口を開けたまま「へえ～、そうなんだ～」とテレビ画面に映る出発式のニュースを眺めていたというのが実際である。細かいルールも許可要件も、何も知らないし、聞かされていない。♪走り出したら止まらないぜ♪と昭和の流行り歌を口ずさむのが精いっぱいなのである。

はて、どうしたものか…都会とされる場所以外の全国津々浦々で推定5000を超えるタクシー屋の親父さんが私と同じようにあんぐりと口を開けたまま途方に暮れていると思われる。この置いてきぼり感は半端ないが…と、この原稿を書いている最中、どうやら岐阜運輸支局が「ライドシェア実施意向調査」なるものを近日実施するようだと情報が入って来た。準特別地域に指定されている我が交通圏で、タクシーが足りないとする矛盾をどうするものか見ものだが、田舎でも動き出すのは間違いのないことのようにである。どうやらホッタラカシにはならないようなのでひと安心である。

さて、この100年に一度、いや一世紀に一度という「IT革命」という産業革命に、我々自身が出くわしたことをラッキーだと思うのかアンラッキーだと思うのか、それは人それぞれだろうが、進化論を説いたダーウィンは次の有名な言葉を残した。「強いものが生き残るのではない、変化に敏感に対応できるものが生き残るのである」という言葉である。しばしば経営者にも向けられる言葉なので、皆さんもご存じだと思う。また、日本一の経営コンサルタントと言われた船井幸雄さんは、成功する経営者の条件として「素直、前向き、勉強好き」の3つを挙げた。かの松下幸之助翁も「素直」を経営者の心がけの一番として挙げている。つまり、経営者として最も重要なことは、目の前の事象をきちんと「受け入れること」「受け止めること」なのである。「大変だあー」とうろたえる言葉も「大きく変わる」と書く。我々も経営者の端くれならば、この変化につ

いて行き、対応しなければならぬことは明白である。そのためには、できるだけ多くの情報を手元に集め分析し、想像を働かせることであ

る。いや、想像などという生易しいものではなく、むしろ妄想の域だ。たとえいかかわりなくとも構わない。頭をフル回転させ、世の中がどう変わるか、取り巻く環境がどう変わるか、自社がどう変われば対応できるか、もちろん損得も重要なポイントである。進むもよし、止めるもよし、しかし変わらなければならない。誠に難しいお題ではあるが、それが経営者としての仕事なのである。

さて、日本型ライドシェアが走り出したことで、結果として日本のタクシーが大きく変わる事となった。日本型ライドシェアは、あくまでも短期的な施策だと言う方が一部おられるようだが、断じてそんなはずはない。もちろん施策としての期限を概ね二年としているということはあるかも知れないが、「タクシーは2種免許でしか運転できない。タクシーは緑色ナンバーである」という法律の大前提を一旦覆したのである。どうあっても、これをなかつたことにはできない。

しかし、それはそれで良いのではないか。タクシーとは何か、どうあるべきかを最初から考え直す良い機会なのである。第一に顧客の視点に立ってビジネスモデルを創り直すことだと思うのだが、誰のための2種免許なのか、誰のための配車アプリなのか、ここから議論を始めようではないか。それは、数十年先にある無人自動運転車の時代に繋がっていく。AIによってほとんどの職が駆逐されるなんてはずはない。タクシーは社会になくってはならない移動ツールであるという大前提は揺るがないと思う。車という箱の中身をどう提供するのか、より使いやすく、より便利に、単なる移動ツールだけではない付加価値をどのように提供し、みんなが喜んでくれる乗り物にするか、そういうワクワク感のある妄想をしようではないか。そう、我々には社会を担う使命があり力がある。なんてたって「タクシーは人様の人生に触れる素敵な商売」なのである。「我々は、人だけを運んでいるんじゃない、心も運んでいるんだ！」…なんちゃって。

